



TITLE:

動詞前綴の意義の組み込みについて

AUTHOR(S):

山口, 巖

CITATION:

山口, 巖. 動詞前綴の意義の組み込みについて. ことばの構造とことばの論理 : 山口巖教授停年記念論文集 1998: 319-327

ISSUE DATE:

1998-07

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/65817>

RIGHT:

動詞前綴の意義の組込みについて¹

§1 印欧諸語を通じて、動詞に種々の前綴を附加し、原基となる動詞の意義にさまざまな変更を加える現象が認められるが、この傾向はスラヴ系諸言語においても、未だ強く保存されている。

この小論の趣旨は、これまで考察して来た動詞の意義構造に、これら前綴の意義がどのような形で組み込まれているかについて、考察せんとするところにある。これまでの考察と、それに至る経緯については、ここで再び述べることはしない。それぞれの論文についてみられる事を期待する外はない。

§2 動詞の前綴は、自動詞、他動詞、あるいは準他動詞の別にかかわらずこれを附加することを得るが、自動詞の意義の基本的な図式は、次のようなものであった。

$$I \quad V(itr.) : [dS_x, K]$$

ここで dS_x は、発話の内容をなす状況の中にあるところの、着目する対象 x の状態 S_x の、一定時間(行為の認定に要する時間)における変化を示している。 K によって示されるのは附加的条件の集合である²。

一般に前綴の意義は、状態の変化そのものを表わすことはないと考えられるから、これは附加的条件の一つであると見做される³。前綴を動詞に附加する操作を $Pref \circ V$ とし、前綴の意義を k とするとき、この操作は次のようにあらわすことができよう。

$$II \quad Pref \circ V(itr.) : [dS_x, k \cdot K]$$

ここで $k \cdot K$ は、附加的条件の集合に新たな条件が加わったことを示している。написатьにおける на のように、何等の語彙的意義をも基幹動詞の意義に加えることがないと言われる、いわゆる préverbes vides も、この手続きの例外をなすものではないと考えることにする。

§3 ところで自動詞に附加される前綴には、「自動詞を他動詞化する」とされるものがある。この種の現象については拙論(1)において考察し、またこの種の前綴の附加によ

¹ 『言語研究』 第81号 昭和57(1982)年3月 18-28頁。

² cf. 論文(2), (4)。

³ cf. 論文(1), pp. 45-46。

て「他動詞化」されるものが、実はより広義の他動詞、すなわち準他動詞に外ならないことを、拙論(2)において示した。

たとえば自動詞である *идти* 「行く」に前綴 *пере-* を附加することによって成った *перейти* 「越える、渡る」は、たとえば *перейти мост* 「橋を渡る」のように、対格補語をとることができる。しかしこの対格補語によってあらわされる対象は、狭義の他動詞の条件とされる、「行為の成立の条件である状況の変化の担い手」ではなく、単なる「行為の成立条件」にすぎない⁴。

すなわち「渡る」という行為は、その本質において決して他動詞ではなく、自動詞である。しかし「渡る」という意義が成立する条件、もしくは「渡る」という行為を「行く」という行為から区別する所以のものは、ある地点、および主語によって示される対象と、この地点との相対的位置関係が逆になるという事実、の存在である。従ってこの地点の存在は、「渡る」という行為の成立のための必須の条件なのであり、また附加的条件の集合 K には、このような関係概念が組み込まれていると、考えない訳にはいかない。

英語の *arrive* と *reach* の場合、前者が *at* と共に用いられ、従って自動詞とされるのに対し、後者が目的格補語をとり、他動詞とされるのは、偏に *reach* が関係概念を成立の条件としているか否かに依存している。

これに対してたとえばスワヒリ語では、*enda* 「行く」に対する *prepositional form* として *endea* 「に行く」があり、これは *Ni-li-mw-endea m-toto w-angu. < I-past-go-to my child. >* のように、直接補語をとることができる。

従ってスワヒリ語の場合には、関係概念の包摂は、文法のレベルにおいて保障されていると言うことができる。これに対して英語では語彙のレベルにおいて、またスラヴ諸語では語構成のレベルにおいて、これを処理していると言える⁵。

§4 ところでこの関係概念に参与する辞項は、自動詞を派生原基とする準他動詞の場合、たとえば *перейти* にみられるように、発話の内容をなす状況の中の、着目する状態の変化の担い手 x と、行為の成立の条件たる対象 y でなければならない。換言すれば、この x の状態と y の状態との間に成立する関係乃至は関係の変化が、附加的条件の集合 K の中に包摂されていると考えられるのである。

従ってさきに k としてあらわした前綴の意義は、実は x と y との間の二項関係を表わす。いまこれを $\varphi(x, y)$ であらわせば、*идти/перейти* のような対立における前綴の附加は、次のように示すことができる。

III $Pref \circ V(itr.) : [dS_x, S_y, \varphi(x, y) \cdot K]$

⁴cf. 論文(1), (2).

⁵cf. 論文(1), (2).

§5 ところで *перейти* のような準他動詞には、*перейти мост/перейти через мост* 「橋を渡る」、*пройти станцию/пройти мимо станцию* 「停車場を通りすぎる」のように、前置詞句をとる場合と、直接に対格補語を要求する場合があります、両者のあいだには動揺がみとめられることを指摘した。そしてその理由を、これが狭義の他動詞ではなく、準他動詞であるために「他動性」が弱い、という点に求めた⁶。

この考えは現在でも変わるものではないが、当時はこれら二つの変異体の間にある相違がどのようなものであるかについて、未だ考えが及ばなかった。

しかし動詞の格支配及び前置詞に導かれる句を伴う広義の支配について考察を進めて行く中で、*перейти через мост* のような型の動詞の意義構造を、次のように考えるに至った。

$$\text{IV} \quad V(qtr.) : [dS_x, F(y), \varphi(x, y) \cdot K]$$

ここで $F(y)$ は、対象 y の、広い意味での「機能」である⁷。動詞の支配については別に論ずる必要があろうが、要するに $F(y)$ とは対象 y もしくは y の状態そのものではなく、 y のもつある特定の側面としての性質乃至は「働き」をあらわすものである。このような抽象的な「機能」が、行為の成立の条件となっていると考えるのである。

§6 以上からたとえば *перейти через мост* における *через мост* との関係は、単なる支配・被支配という関係ではなく、関数と変項の関係としてあるということになる⁸。

そうとすれば *через мост* が $F(y)$ となって S_y の代りに入ることになる。即ち式 IV である。

この場合理論的に言えば、 $\varphi(x, y)$ が K の要素としてすでに存在しているのであるから、 $F(y)$ はいわば余剰的 *redundant* なものに過ぎない。しかし前綴と基幹動詞との意義的な融合が進行すれば、条件 $\varphi(x, y)$ は漸次その明示的な性格を失い、「渡る」という意義の中に埋没して行くことになる。従って S_y を $F(y)$ にかえるのは、失われつつある論理の明晰さを回復しようとする、言語の治癒的な働きのあらわれであると解される。

§7 このような考えからすれば $[dS_x, F(y), \varphi(x, y) \cdot K]$ という意義構造は $[dS_x, S_y, \varphi(x, y) \cdot K]$ から発達したものだということになる。

事実ロムチェフは、*на-* を附加された運動の動詞も、かつて直接に対格補語をとっていたと述べ、次のような例を挙げている。

⁶ 他動性の階梯の定義については論文 (2) 参照。

⁷ 論文 (5) において造格 x の意義を「対象の機能」をあらわすものと考え、これを $F(x)$ のように表示した。本論文でいう $F(y)$ は、造格の意義をも含めた、より広義の機能である。

⁸ いわゆるモンタギュー文法も、そう考えているようである。

- (1) и вшедше въ землю ихъ, раздѣлишася 3 пути ...; и ту наѣхаша пещеру грубоку и непроходну. (Воск. л., 167)

「そして彼等は彼等の土地に入り、三方に分れたそして彼等は深くて通り抜けられない洞窟に行き当った。」

また彼はブイリーナにも同様の場合がみられるとして、次のような例挙げている。

- (2) и наеду я богатыря в чистом поле. (Рыбн. I, 73)

「そして私は、広野の中で一人の勇士に出会った。」⁹

また вънити 「入る」 + 対格補語の例についても、カルスキーの報告がある。

- (3) оулѣб же внида черниговъ. (ПВЛ)

「ウレブはチェルニゴフに入った。」¹⁰

§8 上述のロムチェフの挙げている例、および обидимая заступая 「傷つけられた者達を擁護しながら」のような型の構文について、アカデミーの『比較統辞論』では、これらの構文に前置詞 на あるいは за が欠けているのは、動詞に前綴 за- あるいは на- が存在しているためではなく、当初の「他動性」が弱化した結果であるとして、控え目ながらロムチェフの所説に異を唱えている¹¹。

しかしこのような見解が正しいのは後半の部分のみに関してである。本来自動詞であるべきものが「他動性」を帯びるのは、まさにこれらの前綴のためであると考えられるからである。

このように前置詞を伴わない構文が、どのような相対的年代をもって現実にどれほど存在し、その後どのような経過を辿ったかについては、更に具体的な検証が必要であろう。しかし何れにもせよ перейти の類が対格補語または前置詞に導かれる句の何れかをとるのは、偏にその意義構造の然らしむところであるから、前置詞に導かれる句を伴う場合でも、これを単なる自動詞と同一視することはできない。関係概念が意義の中に組み込まれているからである。この種の動詞を仮に「準自動詞」 quasi-intransitiva と呼ぶことにする¹²。

§9 一方他動詞の基本的な意義構造は、次のように記述された。

⁹Т. П. Ломтев, *Очерки по историческому синтаксис русского языка*, М. 1956, p. 239.

¹⁰Е. Ф. Карский, *Из синтаксических наблюдений над языком лаврентьевского списка летописи, Труды по белорусскому и другим славянским языкам*, М. 1968, p. 55.

¹¹*Сравнительно-исторический синтаксис восточнославянских языков. Члены предложения*, М. 1968, pp. 216-217.

¹²「準他動詞」と他動詞の場合と同じく、「準自動詞」と自動詞とは、後者が前置詞による句を伴う場合には、形式的な区別はない。両者の相違はこの句を伴うことが義務的であるか否かという点にある。

$$V \quad V(tr.) : [dS_x, dS_y, K]^{13}$$

自動詞に前綴が附加される場合と同じように、他動詞の場合にも前綴の附加によって二項間の関係が K に組み込まれると考えれば、次のようになる。

$$VI \quad Pref. \circ V(tr.) : [dS_x, dS_y, S_z, \varphi(y, z) \cdot K]$$

古代スラヴ語あるいは古代ロシア語においてこれに当る構文の存在することは、すでに述べたところである¹⁴。

たとえば、

- (4) повѣлѣ рабомъ прѣвести е рѣку саву. (Савв. кн.)

「彼はサヴェア川を彼等を渡すように命じた。」

- (5) прѣвезе их рѣку (Mikl.)

「彼は彼等を川を渡した。」

しかし現代ロシア語においては、この構文はもはや全く用いられない¹⁵。перевести кого через реку の形が規範的である。この後者の構文における前綴動詞の意義構造は、準自動詞の場合の結果から、次のようになると思われる。

$$VII \quad V(tr.) : [dS_x, dS_y, F(z), \varphi(y, z) \cdot K]$$

自動詞の場合と異なり他動詞の場合に S_z を含む構造を早くに失ったのは、例(4)および(5)にみられるように、 e と $рѣку саву$, $ихъ$ と $рѣку$ の何れが基幹動詞の要求する補語で、何れが前綴の示す関係概念の要求する補語であるのか、判然としない為であったと推察される。

二つの対格補語をとる動詞を仮に「過飽和他動詞」 *transitiva persaturata* と称することにする。

§10 ところで他動詞を原基とする前綴動詞の意義には、未だ別の可能性も存在している。すなわち

$$VIII \quad Pref \circ V(tr.) : [dS_x, dS_y, \varphi(x, y) \cdot K]$$

これは前綴の示す関係概念が、辞項 x と y とに関わっているものである。たとえば Он прочитает книгу 「彼は本を読み通すだろう」、Она дописала письмо 「彼女は手紙を終りまで書いた」のような場合である。

¹³ cf. 論文 (2), (3).

¹⁴ cf. 論文 (1) p. 52.

¹⁵ 例外的に прочитать книгу всю ночь/всю дорогу などのように、всю ночь などが用いられるが、これは現在では状況語と考えられている。

これまで筆者はこのような現象を、「前綴の要求する対格補語と基幹動詞の要求する対格補語が一致する場合」とし、そのことによってこの動詞の「他動性」が強まると考えた¹⁶。

このような説明は誤ってはいないが、いわば ad hoc なものであって、どのような場合にこのような現象が生ずるかについて、理論的、体系的にその理由を明らかにするものではなかった。上述のような構造記述を与えることによって、このような難点が解決され、またこの種の前綴動詞において対格補語が不可欠であることも、よく説明できる。

x の y に対する関係を含むものとしては、例えば次のようなものが考えられる。

выбели́ть 「真白にする」、выме́сить 「十分にこねる」、захвали́ть 「過度にほめちぎる」、израни́ть 「傷だらけにする」、исколо́ть 「一面に刺す」、насо́лить 「塩を沢山入れる」、недослы́ть 「聞きもらす」、недоце́нить 「十分に評価しない」、перева́рить 「煮すぎる」等。

結果としてこれらの動詞は、行為の十分さ又は不十分さ、強さまたは弱さなどをあらわすことになる。прочита́ть книгу もこれに属することは、明らかである。

前綴附加の手続きには、上述の外もう一つの可能性が考えられる。辞項 x と z の関係を組み込む場合である。すなわち

$$\text{IX} \quad \text{Pref} \circ V(\text{tr.}) : [dS_x, dS_y, S_z, \varphi(x, z) \cdot K]$$

これにあたるのは、たとえば Он прочита́л книгу всю ночь, Он прове́л ее всю доро́гу のような場合である。

§11 前綴の附加による支配の変更の一つの場合として、たとえば пить́ всю во́ду/во́ды 「水を飲む」に対する выпить́ стака́н во́ды 「コップ一杯の水を飲み干す」のようなものがある。これは前綴 вы- の意義が行為の完遂を示すものであるために、量的に無限定の対象をあらわす語を補語にとれない、という事情を反映するものと考えられる。換言すれば「飲み干す」という行為の成立に必要なのは、ある対象、たとえばここではコップの中の水の量が変化して零になることであり、したがって水そのものではなく、水に関するコップの状態の変化なのである。

このようにある対象 y に関する z の状態と x の状態との関係を、仮に $\varphi_y(x, y)$ と表示することにすれば、пить́ の意義を X のようなものとするとき、выпить́ の意義は、たとえば次のような構造をもつに違いない。

$$\text{X} \quad V(\text{пить}) : [dS_x, dS_y, K]$$

$$\text{XI} \quad V(\text{выпить}) : [dS_x, dS_y, \varphi_y(x, y) \cdot K]$$

¹⁶cf. 論文 (1) pp. 52–53.

есть завтрак 「朝食をとる」に対する съесть остаток завтрака 「朝食の残りを平らげる」のような場合も、これに当たると考えられる。

ところで $\varphi_y(x, z)$ は、辞項 y (水) と z (コップ) との関係を ψ とするとき、 $\varphi(x, \psi(z, y))$ のことであると考えることができる¹⁷。これは $x \circ \varphi \circ (z \circ \psi \circ y)$ と書けるが、このことによって、たとえば выпить стакан, съесть остаток のような語結合が意味をなさないことが、よく理解できる。 $\varphi_y(x, z)$ は実は三項関係なのである。

§12 ところでたとえば читать 「読む」に対する прочитаь についてみれば、прочитать книгу の場合には $\varphi(x, y)$ が条件の集合 K に組み込まれている。また прочитать всю ночь 「一晩中読み明す」は、自動詞の читать 「読書する」を派生原基とする準他動詞で¹⁸、条件 $\varphi(x, z)$ が組み込まれているとみられる。更に прочитать книгу всю ночь の場合には、条件 $\varphi(y, z)$ が組み込まれている¹⁹。

このことから前綴 про- によって組み込まれる条件についてみれば、どの辞項が参与するかにして無規定であることがわかる。このことは、前綴 про- が「通過」をあらわすだけであって、何が何を通過するかについて予じめ示すものではないという、我々の言語直観とよく符合する。

この観点からすれば、前綴によって組み込まれる関係概念にかかわる辞項は、この動詞の意義の中に可能性として含まれているにすぎないということになる。すなわち читать の意義を $V(\text{читать}) : [dS_x, dS_y, K]$ とし、関係項が無限定である関係概念を仮に $\varphi(i, j)$ とすれば、прочитать の意義は、次のようにあらわされる。

$$V(\text{прочитать}) : [dS_x, dS_y, (S_z), \varphi(i, j) \cdot K]$$

いま 1) dS_y が包摂され、2) $\varphi(i, j) = \varphi(x, z)$ とすれば、 S_y の項は不要となり、прочитать всю ночь における прочитать の意義「読み明す」が発現する。また $\varphi(i, j) = \varphi(x, y)$ ならば、たとえば прочитать книгу における прочитать 「終りまで読み通す」の意義が、更に $\varphi(i, j) = \varphi(y, z)$ が与えられたならば、たとえば прочитать книгу всю ночь における прочитать の意義が、それぞれ発現することになる。

§13 このように考えれば、前綴の附加によって語彙のレベルに生ずる多義性は、実は見掛け上のものに過ぎないのであって、そこにはさまざまな現実の意義を発現させる可能性をもつ、潜在的な一つの意義を、想定する必要があるということになる。ア・プリオリ

¹⁷すなわち「 z の y に対する関係に対する x の関係」である。

¹⁸читать 「読む」、пить 「飲む」などは、結合の蓋然性が最も高い книгу 「本」、воду 「水」などを自己のうちに包摂して「読書する」、「水を飲む」という自動詞になる。これは $[dS_x, dS_y, K]$ の y に常数 a を代入したもの、すなわち $[d_x S, (dS_a), K]$ と考えられる。

¹⁹編集の時点で考えて見れば、この場合も「コップ(の水)を飲み干す」の場合と同じく、実は $\varphi_x(y, z)$ であると思われる。

に与えられたさまざまな現実的意義の集合に対してある動詞が与えられる、といったものではないとすべきである。

参考文献

- (1) A Consideration on the Category of Transitivity in Russian 『人文』第20集 (1974), pp. 44-54.
- (2) 「準他動詞について」『ロシヤ語ロシヤ文学研究』第8号(1976), pp. 1-12.
- (3) 「古代ロシア語における第二対格について」『人文』第23集(1977), pp. 73-86.
- (4) Remarks on the Meanings of Russian Verbs, *Japanese Slavic and East European Studies*, Vol.1, 1979, pp. 1-14.
- (5) 「造格の機能といわゆる叙述の造格について」『人文』第28集(1982), pp. 91-116.

Summary

Incorporation of Meaning of Verbal Prefixes

Generally speaking, Indo-European languages, including Russian, make use of prefixes so as to incorporate relational concepts into the meaning of root verbs.

It is observed, however, that some intransitive verbs turn into so-called "quasi-transitives" by means of prefixation and come to require an accusative complement, which is concurrent with the later developed construction of "preposition plus accusative".

This process can be denoted by the formula:

$$\begin{aligned} Pref \circ V(itr.) &= Pref \circ [dS_x, K] \\ &= [dS_x, S_y, \varphi(x, y) \cdot K] \\ &= V(qtr.) \end{aligned}$$

Where $Pref \circ$ denotes the operation of prefixation; dS_x — the change in state of the object x ; K — a set of additional conditions; and $\varphi(x, y)$ — a certain binary relation between x and subsidiary object y , then the accusative complement denoting

y is indispensable. cf. **читать** – **читать книгу** but **прочитать книгу** and not **прочитать**. This can be denoted by the formula:

$$\begin{aligned} Pref \circ V(tr.) &= Pref \circ [dS_x, dS_y, K] \\ &= [dS_x, dS_y, \varphi(x, y) \cdot K] \end{aligned}$$

If y and one more additional object z are relevant, than the verb becomes “over-saturated” and required double accusatives. cf. **превести ихъ реку** “to make them corss over the river”.

This construction has changed in the course of time into the construction of preposition plus accusative as is observed in Modern Russian. cf. **перевести через реку**.

This is the case that can be denoted by the formula:

$$\begin{aligned} Pref \circ V(tr.) &= Pref \circ [dS_x, dS_y, K] \\ &= [dS_x, dS_y, S_z, \varphi(x, z) \cdot K] \end{aligned}$$

Again, if y and z are relevant, then the verb requires a noun in the accusative like **всю ночь** “all night”, **всю дорогу** “all the way” etc., which is conceived of as an adverbial modifier. cf. **прочитать книгу всю ночь** etc.

This can be denoted by the formula:

$$\begin{aligned} Pref \circ V(tr.) &= Pref \circ [dS_x, dS_y, S_z, K] \\ &= [dS_x, dS_y, S_z, \varphi(y, z) \cdot K] \end{aligned}$$